北九州市の文化財を守る会

会　報

No. 46　59.3.10

発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7－2
森鷗外旧居内
電話　（093）531－1604

印刷　コトブキ印刷
北九州市小倉北区昭和町15－1
電話　（093）931－6191

天然の博物館

平尾台を護ろう

溝口　連

私の手許には、平尾台に関係のある切抜帳だけでも三冊ある。それをパラパラとめくっていると、昭和二十八年頃の古新聞の切り抜きが目に留った。題は「北九州食べ歩る記」美味求真氏の探訪記である。

「日本一のカルストの景観を眺めて、信州更科のそばより細くてうまい、そば粉だけのねばりと風味のある、馬の鼻息でもすぐうだると所の人が自慢する、平尾台手打ちのそばきりを、チュッチュッとのみこむ味ったら、とても言いあらわすことはできない。」

と紹介して、壱岐尾コメさん（当時七十二才）が石臼でそば粉をひいている写真と、

そばは気のもの　ヤーレ　気ながな恋よ　ノーサンヨイナー
庄屋の娘が　ヤーレ　文書いた　ヨーイ　ヨイ

という粉ひき唄が載せてある。その頃ののどかな平尾台風景のひとこまである。また別に、阿部金剛画伯の談として、

「平尾台のカレンフェルトの奇観は、全山石灰岩が乱雑な並び方をしているように見えるが、その中に、一連のつながりがあり、自然現象とは言いながら面白味があふれ、部分的に見ても充分絵の法則にかなっており、各所にドリーネと称するすりばちのような穴があるが、この景観の自然美こそ、天然の名苑と言いたい。この独特の面白味と、雄大なる大景観を具備した平尾台は貴重である。

今一つ、付け加えて置きたいことは、心身の憩いの場として親しまれる間はよいが、有名になり過ぎて観光施設や地下資源の開発によって、雄大な自然の大景観をこわすようなことなどあってはならないと思う。」

と掲げてある。私も全くこれと同感である。

平尾台石灰岩層は古生代ペルム紀（二億八千万年前　～　二億二千五百万年前）に、五千万年以上もかかって形成されたものである。其の後、二億年に近い歳月を経て、ようやく新世代第四紀となって現在の温帯カルストとして模式的な地形が出来上った。台上に見られる数段の平坦面や石灰洞の形成過程には、氷河期の気候変化、海水面の変動などが大きく影響していると思われる。地表にはドリーネ・カレンフェルト、地下には石灰洞（現在確認数一一二）・鐘乳石等が良く発達し、諸現象にカルスト地形の特徴をよく具有している。

台上には自生植物九二〇種、その中で他に生育地が稀なものが六〇種もあり、石灰岩台地特有の植物生態は学術上貴重視されている。

また、洞窟内堆積物から古代の動物化石、ステゴドンゾウ・ナウマンゾウ・トラ・オオツノシカ・オオカミなどが見出されている。石灰分を含んだ地層は、動物の骨の化石化を助ける。今後これらの石灰洞から貴重な遺物が発見される可能性を秘めている。

昭和三十七年・四十四年の調査によって石器類・縄文式弥生式土器を多数採集することができたが、これも研究の緒口を見出したに過ぎない。

このように、平尾台は、古い歴史や、大景観が我々の心を引き付けるばかりでなく、地形・地質・動植物・考古・地史・人文等学術的に研究せねばならぬ稀少な対象物である。永い間、陸軍演習場・要塞地帯の厚い幕に蔽われていたため、充分な研究がされていない。終戦後、これが開放された時、濱田良祐市長・我有文雄氏・その他先覚者による平尾台全面確保の努力も空しく、国指定文化財保護地域として残されたのは、三二〇ヘクタールに過ぎない。

何億年とかかって造り出された石灰岩台地、この大自然も破壊するには何年もかからない。一度失われたら取り返しはつかない。

平尾台は、我々の宝である。せめて残された地域だけでも、護り抜い

観光まつり今昔

―平尾台観光協会の歩み―

山本　公一

平尾台観光協会の事務局は、小倉南区東谷出張所内にあるが、天然記念物平尾台を永久に保存するために、地元民の熱意により設置された任意団体である。

この観光協会なり観光祭は平尾台愛尚会によって始められたものである。平尾台愛尚会は終戦直後の物資の乏しく、道義の退廃した時代に、地元の有志が、溝口連氏を中心として、〝国破れて、山河あり〟の心をもって、軍国のベールを脱いだ、元陸軍演習用地平尾台、全国に冠たるカルスト高原の景勝地を保存、宣伝するため昭和二十一年四月三日、結成発足したものである。

当時の浜田小倉市長の協賛、企救郡の一郡一村であった東谷村が小倉市と昭和二十三年に合併、平尾台は、東谷の平尾台であるばかりでなく、小倉の平尾台、北九州市の平尾台として陽のめを見るに至った。

その間、前述の平尾台の歴史が物語るように、地元民、東谷農協を中心として、平尾台観光に関する運動並びに事業が展開されたので、初代の観光協議会長は、東谷農協の組合長だった木田虎彦氏が就任され、第二代は、地元の〝銘酒無法松〟の醸造元の社長、山家治重氏、続いては、農協組合長だった、石原町の延吉静男氏、平尾観光タクシー社長の故栗山桂氏が会長ということで、観光祭などが実施されてきた。

現在では、栗山会長時代、副会長だった、東谷地区自治連合会長・東大野八幡神社総代頭の経歴を持つ市丸の中村正氏が会長を勤めており、会の組織としては、東谷地区各町内会長、各種団体の長が理事となり、会の事業を推進している。

自然保護か、産業開発かということで波らん万丈をきわめた平尾台も、昭和二十七年十二月、重要文化財天然記念物として文化財保護委員会の指定、昭和四十七年十月、北九州国定公園に指定、平尾台問題に一応の終止符はうたれたものの観光協会なり観光まつりの足跡を振り返って見よう。

まず、若草が萌え始める頃ともなると、登山者が激増する。その時期をみて、当日台上において〝登山安全・火災予防〟（数年前、山焼の時に小倉南消防署の方が殉職されたことは、脳裡に刻まれていると思う）のための神事が、東大野八幡神社の宮司によって執り行われる。会場としては、平尾神社や、牡鹿鐘乳洞（農協が一時管理）観光地百選高の成田不動尊前で、観光地百選高原の部第三位入選を記念して作られた平尾音頭の踊が、地元婦人会によって、平尾分校の運動場に仮設舞台を作り公開され、郷土演芸大会として盛会をきわめた。現在のよう、分校体育館、平尾公民館もなかった三十年前であれば、準備は大変なものであった。

その他、宝さがし、美人モデルを雇っての写真コンクールも実施された。

また、ミス平尾台の推せん（これは、地元町内会長さんの意見として推せんに難があるとかで三回位で中止になった。）審査員の一人に夜の動物園などの著者であり童話家である故阿南哲郎先生がおられたことを記憶している。

二代会長山家治重氏のお話によると、毎日新聞の協力により、北海道よりスズラン娘が二人、鈴蘭の花束をもって観光祭の当日、応援に馳けつけて下さったという一幕もあったとのこと。

その時、持ってきて下さった鈴蘭の株は、平尾分校の庭に植えられたと聞いているが、果して今も花を咲かしてくれているだろうか。

現在の観光まつりは、昨年で三十二回を数え、台上の神事は、そのまま受継がれているが、他の行事は、参加者のことを考え、七月のおわりに、登山口にある東谷興農会館を中心として行われている。勇壮な平尾太鼓の公開、会館グランドで繰り広げられる民謡の夕べ、会館横の東谷川の堤防では、夜空を彩どる花火大会が催されている。

最後に平尾台音頭を紹介すると

平尾台音頭

松本耕青作詩
平井淳衛作曲

一、萌える若草霞にあけて
春の平尾は緑の大地
肩を並べて小径を行けば
浮かれ蝶々も従いて来る
ソレ、ツイテクル

二、煙ゆかしやキャンプで暮らしゃ
夏の平尾は光に溢る
緑十里に牧牛むれて
並ぶ姫百合美しき
ソレ、ウツクシキ

三、山の娘の小唄も晴れて
秋の平尾は紅葉に燃える
千草乱れて花咲く中に
奇岩奇石の面白さ
ソレ、オモシロサ

四、積る白雪人情もあつく
冬の平尾は山小舎ごもり
踊るお客も囃しにのって
今年しゃ豊年ぼたん雪
ソレ、ボタンユキ

五、ドリーネ、ウバーレやれ鐘乳洞
カルスト平尾は日本の誇り
今度生まれた北九州の
市の中だよ皆おいで
ソレ、ミナオイデ

編集後記

小倉南支部長

会報第四十六号の発行が少々遅くなりましたが、やっとできあがりましたのでお届け致します。

私事で申し訳ありませんが、第四十四号発行は小倉南支部の担当でありましたが、私入院のため、事務局に相談申し上げ、小倉北支部に編集をお願い、更に次号を門司支部にお願いする結果となり、まことに申し訳ありませんでした厚く感謝申し上げます。

更に第四十六号を編集するに当っては、又々一月末日まで入院し今度は支部役員の方々にご迷惑をお掛け致した次第です。しかし、溝口理事さんを中心とした「三谷昔がたり」同人の皆さんが、平尾台特集号として編集され、やっとお届けすることができました次第です。

紙上をお借りして多くの皆さん方におわびと共にお礼申し上げます。

◆　絵はがき「森鷗外旧居」一部（十二枚及び付録）三〇〇円守る会事務局他市内有名書店及びデパートで販売致しております御利用下さい。

◆　新会員の勧誘に御協力お願い致しますと共に、自由投稿を歓迎致します。

◆　年度末が迫りました。会員名簿整備の都合もありますので、会費末納の方は、至急納入下さるようお願い致します。（事務局）

有史以前の平尾台

小柳　秀次

平尾台は古地中海といわれるテーチス海の東端の地向斜に、生物礁として形成されたもので約二億五千万年前のことであると言われている。

新しく唱えられる学説によると石灰岩は南方遥か数千粁の海中に於て生成され、プレートの移動によって運搬されて現在の地殻の上に押し上げられたものであると言われ出している。

中世代から新生代に移り変る時期（約六千七百万年前）に、地下活動が盛んになり後期花崗岩類と呼ばれるマグマ起因の岩石が形成された。貫山はこの時に形成されたもので平尾花崗閃緑岩でできている。平尾石灰岩の中にも岩脈状にマグマが貫入した結果、平尾台の石灰岩は熱変成を受け結晶質となり、石灰分を残した生物の化石はこの時におおかた消失してしまった。岩脈状の花崗閃緑岩は、茶ケ床園地、中峠付近の鬼の洗濯岩鬼のへこほし岩、青龍窟上の鬼の唐手に特異な岩層を見せている。結晶質の石灰岩は、火力に弱く直ぐぼろぼろに風化するので、土地の人は米石と呼んでいる。所によって結晶の大きさが違い、大きいものは方解石特有の劈開を示す。

新世代第四紀（約三万三千年前）には阿蘇山が大爆発をし、南北の島が連って九州島を作った。この時の火山灰石層が平尾ポリーエに厚く堆積している。この頃、九州島はアジア大陸と陸続きになった時があり、大陸から大型の陸生動物が移ってきた、これを追って人類も移動してきたと考えられる。平尾台の洞窟堆積物の中から、その頃にいた動物の化石が多数発見されている。

平尾台の上は地質上河川がない代りに諸所に湧泉があり、周年水温の変化が少く（摂氏一四度）、清澄で枯れない所が存在する。

土壌は水通しがよく、ドリーネの中でも大雨の後、水はけがよいので湿潤になる惧れがなく、住居を作るのに適した場所を見つけやすい。その上、石灰岩台地特有の洞窟が各所に存在していて、洞内は夏は涼しく冬暖いとあれば、石器時代から人類が住みついていたことは想像に難くない。

台上に何時頃から人類が登場したか判っていないが、有史以前の遺物が、数多く見出されている。

左の表は昭和二十七年に小倉市が山口大学に委嘱して行った平尾台上遺跡表面調査の報告をまとめたものである。

台上各所で見出される石器類の中に黒燿石の矢鏃や剥片が多数ある、ここに住んでいた狩猟を主とする古代人が、他の地方の人と交易をしていたことをうかがい知ることができる。

貴重な遺跡であった「お花畠」は残念なことにセメント会社の廃土置場となって埋没してしまった。

現在、石鏃が最も多く見付かるという「鬼の木戸」あたりも、埋立てられたり、泥土が流れ込んだりして、見る影もなく変貌してしまいつつある。鉱区内にある遺跡は産業優先・資源開発の名の下に潰滅してしまうのも、そう遠いことではあるまい。

ここに住んでいた古代人は、猪を追い鹿を狩り、木の実や食べられる草木の新芽・根茎を探しまわったり、時には麓に下り、海や川の魚貝類を取って命をつないでいたに違いない。岩に攀じ、野を駆けり、自然の中に逞しく堪え忍んで生きていたであろう。

平尾台遺物出土地表

種別 ＼ 出土地	土器破片 縄文	弥生	土師	祝部	石器類 石鏃	その他	剥片
おはなばたけ	一六七	・	八六	一〇七	九六	一三	五二四
ぶえんがはち	四	・	六五	三	九	・	六〇
鬼の木戸	四	・	一	・	・	一	一
平尾聚落付近	九	・	二七	一九	二	一	一四
かがり火盆地	・	二三	・	・	・	・	七八
広谷	一〇	一〇	一〇	三	七	三	一五〇
その他	一七	二	一三	一	二	・	七

文献・伝説による平尾台

谷端　勲

直接平尾台に関する文献は非常に少いが、私の目についたものを伝説をはさんで年代順に列挙してみることにする。

一、明治時代、京都郡出身で、神代史研究学者である挟間畏三氏が、その著「高天原所在考」に、「神代の時代に、平尾台は高天原にして、青龍窟は天照大神の宮居なる天石窟にして、後に豊玉姫命が宮居したにより青龍窟という。」と述べている。

因に、氏は京都郡一帯を調査、考証して、これ等は神代の遺跡であると確認して、「神代帝都考」を著している。

二、井出浦の尻振祭の縁起等によると、素盞嗚尊が平尾台や企救郡で活躍したという伝承が残っている。八田、八岐、山田などの呼称が混然として八日祭を形成する。

三、日本書紀に、景行天皇十二年（前一〇〇年頃）筑紫に幸し、豊前長狭県に到り、行宮を立てて其所を京と称ばれたと書いてある。これが京都郡の名の起りである。

続いて速見邑の条に、

「茲山有ニ大石窟一、日ニ鼠石窟一、有ニ二土蜘蛛一、住ニ其石窟一、（中略）於ニ直入県祢疑野一、有ニ三土蜘蛛一、」とある。

挟間氏をはじめ豊前の学者の間では鼠石窟は青龍窟、祢疑野は貫野ー平尾野と解するのが正当であると信じられていた。

土蜘蛛というのは、狩猟を主とする部族が洞窟に住居していて、中央から侵入してきた勢力に抵抗したものと考えられる。

四、平尾台の東に等覚寺という所がある。幕末まで修験道の栄えた所で今だに松会を継承している。

そこに伝わる記録を見ると、

「天平六年（七三四）奈良東大寺の僧恵空上人が、此所に来りて等覚寺を開き神仏を併せ祀り、青龍窟に豊玉姫を祀り青龍大権現と称し、等覚寺（白山三社神社）の奥ノ院としたり。」とある。

五、井手浦西円寺阿弥上人の千仏不動記に、

「伝曰、豊前国規矩郡大野庄千仏山千仏寺、天慶元年頃空也上人邀ニ化鎮西一、数々過ニ当地嶮路奇峰一、其愛ニ勝景而清寂一、建ニ立一宇一。」とある。

天慶元年は西暦九三八年に当る。後に千仏寺は福丸の願光寺の末寺になったという。願光寺は真言宗であるので、千仏寺に弘法大師像を安置し、別に不動明王も祀った。

六、天暦七年（九五三）、等覚寺の僧覚心上人は、寺を修験道に改め、山伏の修行する宿泊地を定めた。平尾台の千仏、龍ケ鼻、塔ケ峯もその中に含まれていた。

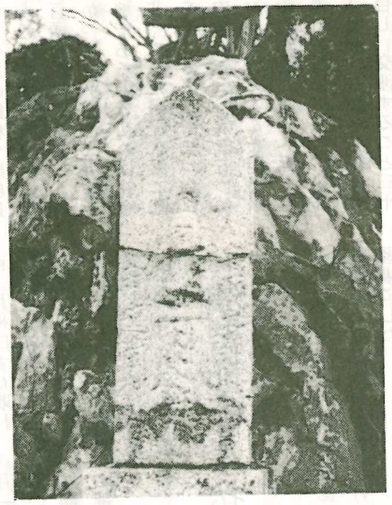
七、白山神社境内から出土した経筒に寛治八年（一〇九四）の銘が刻まれている。それは豊前出土の経筒のうち二番目に古い。最も古いのは小倉南区山本出土の西明寺のもので寛治元年の銘がある。

八、当時は各地に荘園が開けてきて、豊前国府は豊津あたりにあった。その頃の道は、海岸線が山えて朽網・貫・長野・横代と連絡するか、千仏から不動坂を登り平尾を経て大野荘へ結ぶ道も相当に利用されたに違いない。荷駄では不動坂が険しいので、千仏鐘乳洞の方を迂回した。現在も「駄廻り」の地名が残っている。

九、吹上峠より東百米の所に祀ってある石仏の中に一基だけ古い瑠璃観音像がある。

この石仏は以前平尾台の道端にあったのを此所に移したもので、「文暦元、新道寺村」と刻み込まれている。文暦元年は西暦一二三四年で、鎌倉時代、執権北條泰時の頃に当る。（本誌六頁　参照）

この頃には平尾・千仏・内ノ蔵（三山と称す）が新道寺に属していたことを示すことになる。



瑠璃観音像

一〇、「企救郡誌四」舛塚の条に、「（水町村）香春道と仲津道の分れ立り。白石に梵字在。左の方に低く康永丙二天暦、癸未三月十三日と云々。将軍、舛目究の役人を下し給ひ、此印の碑をも建てられければ、村人打寄て喜び居たりけるに、矢山の人来かかり、其酒をのみしに依り、矢山をも企救の内に定められたりとぞ。」とある。康永二年（一三四三）は足利尊氏の時代である。矢山村は明治三十一年まで企救郡に属していた。

今も三笠台の南に追分という地名があり、そこに頭部が欠けているが「や」やま「平」尾道「う」ちのく「道」寺」と刻んだ御影石の道標が残っていて、昔、交通が相当にあったことを物語っている。

一一、等覚寺は中世以来、彦山六峯の一になり、彦山との交流が深かった。永和年間（一三七五～一百と称された。しかし、応永年間（一三九四～一四二七）兵厄に遭い、僧徒が多数戦死したという。

一二、千仏寺は、大友宗麟により永禄年間（一五五八～一五七〇）に焼き払われた。（千仏不動記）

一三、等覚寺はその後、復興しかけていたが、天正年間（一五七三～一五九一）、またまた、戦争に巻き込まれて、神社仏閣悉く焼失してしまい、僧徒は四散してしまった。

一四、豊前古城記に、塔ケ峯城「城跡、井出浦塔ケ峯にあり。右は天正の頃長野筑前守城を築かんとす。三月廿五日大勢にて普請している処、豊後勢平手口と云う所を押通、時に大勢の声を聞、所の者に尋、直に攻掛る。折節霧深くかけ、夢にも知らず近々と詰寄、声を発しければ、長野勢周章して残らず討死す。」とある。

一五、慶長十九年（一六一四）細川忠興が等覚寺白山神社の神殿を建立し祭事を復興した。小笠原氏になっても、庇護したので次第に盛んになってきたが、昔時の盛大さには及ぶべくもなかった。

龍ケ鼻は藩政時代になってからも、英彦山山伏峯入の四十八宿の一つになっていた。現在でも彦僧道と呼んでいる所がある。

一六、平尾に住んでいる人は、「自

て壱岐から来たので、壱岐尾・壱岐村の姓を名乗っている」とか「いや真田幸村の子孫だから壱岐村というのだ」とか言っている。その外「森山・森本姓の者は葛原あたりから入って来たのだ」、又は「平家の落人が住みついた」「キリシタン断圧を避けて逃げこんだ」などと諸説入りまじって伝えられているがどれも確証はない。

一七、元和八年（一六二二）七月の規矩郡人畜改帳には、平尾は新道寺の枝村であるためか、別記されていない。

「新道寺村

家（牛屋馬屋共）五十六軒
男女合計　百四十六人
牛馬合計　二十三頭」

に包含されている。なお隣村の矢山村は二地区を合わせて、

「家（牛屋共）　十九軒
男女合計　四十人
牛馬合計　四頭」

となっていて、平尾台周辺の戸数人口は驚くほど稀薄である。

一八、集落の後、窪地の帰り水（村の人は川と呼んで水汲場にしていた）の傍に水神様の石祠がある。この両側に刻み込んだ字は、

（右側）　小森四郎□□
（左側）　寛政八辰九月吉日

と読むことができる。寛政八年（一七九六）は徳川家一一代将軍家斉の頃に当たる。（小森姓、手永）

一九、村の中央、三叉路に道祖神の碑がある。表に三行に並べて、

「天保五年」「猿田彦大神」「二月下旬」と刻み込まれている。天保五年（一八三四）は甲午の年で将軍はやはり家斉である。

二〇、平尾台は草苅り場になっていて、企救郡、京都郡、中津郡、二里三里離れた所からも、盆過ぎになると、牛馬を牽いて草刈りに登ってきた。牛馬の飼料や屋根葺用の茅を求めてである。台上に四百頭・五百頭の牛馬が登ることも珍しくなかった。平屋台は新道寺村の所有地であるので初めは礼金を納めて苅っていたが、次第に乱れて争いを生じるようになった。

ついに安政二年（一八五五）には横暴な行為を抑えることが出来ず、新道寺村から大庄屋へ訴え出た。郡筋奉行の耳にも入り、三郡四手永の大庄屋・庄屋・方頭が相対して集合し、交渉すること三十日に及び、「草刈料、米十石を新道寺村に納め、夫々の草苅場の境界を定め、毎年代表者が談合を済ませてからでないと苅り始めない」ということを決めて和解が成立した。これが慣例となって明治以降もこの取り決めが守られた。

二一、安政五年（一八五八）三月、小倉藩主小笠原忠嘉は世状の切迫に対応して平尾台お花畠で二千三百人を動員し具足調練（軍事訓練）を行った。

二二、元治元年（一八六四）第一次長州征伐の時、九州口副総督として越前藩主松平春嶽、十月小倉着陣。九州諸藩も小倉口に集結した。小笠原藩は出陣の諸将士の無聊を慰めるために、十二月十四日、松平侯・細川候外諸候を招待して龍ケ鼻で猪猟を行い二十頭捕獲。

二三、慶応二年（一八六六）六月、第二次長州征伐の戦起り、幕軍不利、九州口また敗れ、八月一日小倉藩は城を焼いて香春に退いた。以後企救郡各地で野戦が展開された。十月二十七日高津尾の陣敗れ、退却して金辺峠に塞を築き、廣野（平尾台）其の他に兵を配し死守の陣を敷いた。戦況不利の中に和戦となり、企救郡一円（平尾台も）長州藩の占領治下に置かれた。

二四、明治三年（一八九七）は新年早々、大雪であった。

小倉南区道原の浄念寺の記録に

「今年は近年稀なる大雪にて、一月十一日には寺の庭先にて、一尺五寸（約四十六糎）余なり。東谷村母原字花枝に在住の宮崎大宮司、廣野山を越えんとして雪深く、雪中に凍死す。あわれなる事なり。」

と誌されている。宮崎家は旧家で東大野八幡神社の神官であった。

演習地から払下げに至るまで

内山　茂

明治四十五年に台上の大部分を陸軍省が新道寺村から買上げて演習場にした。

面積　一、九四九、九七四坪
代価　一、四、五〇〇円

一万坪当り約七十四円、四坪で三銭弱にしか当らない。お国へ御奉公という気持の表われだろう。しかし当時は日当四十銭の時代なので、莫大な金額に感じたようだ。

大正五年には兵舎も建ち、静かだった平尾台は、演習がある時には一変して賑やかになった。平尾の人は現金収入が出来るようになったので歓迎したようである。

兵士は演習で平尾台へ登る時、道が険しいので苦労をした。あまりきついので、登り口の清水には「末期（マツゴ）の水」、急な岩の坂には「念仏坂」、吹上峠には、やっと楽になるというので「婆婆峠」などという名をつけていた。

平尾の聚落は、十八戸であったが、大正十年に火事があって、住家六軒、納屋十棟が全焼した。その後、昭和十一年にも火災に遭い住家四軒、納屋八棟が全焼した。一時は十一戸まで減った。

昭和十二年、日支事変が始まると演習が頻繁に行われ、麓から新道が造り始められて、七合目まで伸びて行ったが終戦で中止された。

敗戦、軍隊の即時解除により、平尾台にも大変動が待ちかまえていた。演習用地は国有財産として大蔵省へ所管が移された。

昭和二十二年十月、さらに開拓財産として農林省へ移管された。

この頃、国内は混乱し、物資の欠乏・道義の敗退はその極に達した。「こんな時こそ、平尾台は、心身の浄化のために活用されねばならぬ。大自然に接し、浩然の気を養わねばならぬ。」このことに気付いた地元東谷の有志によって、「平尾台愛尚会」が結成されたのは昭和二十一年四月三日である。

北九州五市二郡に宣伝して廻ったが、この趣旨に最も深い関心を示したのが時の小倉市長浜田良祐氏である。氏は早速、「時節柄、すばらしい着想だ。平尾台の大自然を再確認せねばならぬ。私も極力応援しよう。」と確約してくれた。

県の斡旋により平尾台に開拓希望者五十五世帯が入居し、旧兵舎を利用した。人力だけで笹や茅の生い茂った所を開墾することは容易なことではない。資金、資材も乏しく、実収を得るようになるまで、血の滲むような苦労の連続であった。

昭和二十三年九月十日、東谷村は小倉市に合併した。

これを機に「平尾台愛尚会」は「平尾台観光協会」と改称して、小倉市観光協会の応援を得て活動

するようになった。

採草地　払下げ問題

平尾台周辺の人々は台上を採草地としていて、大正の初め平尾台が陸軍演習地となっても、演習がない時は採草や放牧に利用できるように陸軍と借地契約を結んできていた。戦後、入植者開拓地となったが、広大な土地であるから、手がつけられなくて多くの土地が残されていた。

東谷側では各地区ごとに、開拓地以外の原野を昔のように採草・放牧地として利用できるよう払下げを要望するようになった。昭和二十四年二月から四月までの間にその請願書が提出された。東谷農地委員会はこれをまとめ意見書を付けて熊本農地事務局に提出した。

浜田市長は、このように分散して払下げになれば、観光面だけでなく、学術的に貴重な平尾台の利用価値が著しく制限され、破壊される惧れが強まると考えて、小倉市が一括して払下げを受けて対処しようと考えた。

又、市当局は平尾台の自然保護・観光開発を標榜として各方面に運動を続け、あらゆる手段を用いてその宣伝活動を展開した。

九州地方の民状並びに復興状況視察のため来下された三笠宮殿下に、昭和二十四年七月一日、平尾台御登台を仰いだ。宮様は七合目より馬を召されてお登りいただき、お立ちになった展望台に「三笠台」と名付けることを許された。

昭和二十五年五月十三日、県立筑豊公園の区域に指定。

同年九月、毎日新聞社の「日本観光百選」国民人気投票により高原の部第三位に入選した。

東谷地区採草地関係者と平尾台開拓農協との間に数回協議会を持ち、払下げ区域の面積・境界を詰っている中に、平尾に前から住んでいる者で結成した平尾台増反組合から異議が出て難航した。

翌昭和二十六年になると、豊国セメントが羊群原の真中の試掘出願し払下げ運動を始めたり、京都郡諫山・椿市・白川の三村からも権利を主張して払下げを出願した。

紆余曲折、混乱に混乱を重ねた末、昭和二十七年七月、払下げが確定した。

結局、次のように分割された。

平尾開拓農協	各戸 一町三反
平尾台増反組合（他に薪炭用地を加ゆ）	計二四三町歩
東谷農協	二六一〃
白川村	一五〃
椿市村	四七〃
諫山村	三〇〃
保有地（羊群原）	七〇〃

小倉市は農民を主体とした団体でないので、開拓財産の配分は認められなかった。このため市は現在に至っても文化財保護区域確保のため苦労している。

自然保護か開発か

前田守次

自然保護対策に最も障碍になったのは、国の資源開発・産業優先という方針であった。

昭和二十六年二月、鉱業法改正石灰石が鉱物に追加指定され、平尾台に目を着けた豊国セメント社をはじめ、住友・三菱・日本セメントの各社が試掘権を出願し始めた。

小倉市は、これでは平尾台の自然が破壊されるので、天然記念物に指定されるように関係方面に運動を展開した。

翌二十七年六月、小倉市は文化財保護委員会に羊群原一帯約三二〇ヘクタールを重要文化財保護指定を申請した。

同月、福岡通産局は豊国セメント社に羊群原付近約一〇二ヘクタールの試掘権出願を認可した。

同年七月には、小倉市は県知事に対し、文化財保護指定申請区域の鉱区禁示方を要請し、国の土地調整委員会に対し、豊国セメント社の試掘権設定許可の取消し裁定を申請するなど必死に対抗した。

土地調整委員会は、同年十一月現地調査、審問を行ない、十二月小倉市の異議申立てを全面的に却下した。

十二月二十二日、文化財保護委員会は小倉市の文化財指定申請に対し指定を決定した。

昭和二十八年二月、小倉市は土地調査委員会の裁定を不満として東京高裁に控訴した。これが十年裁判闘争の始まりである。

これに対し豊国セメント社は、同年三月、文化財保護委員会に対し、文化財指定地域の一部変更を申請し、翌二十九年五月大へら山十六ヘクタールについて現状変更の許可を得た。

同二十九年七月、東京高裁に於て、土地調整委員会の裁定を取消す判決が下り、小倉市の勝訴となった。同月、土地調整委員会は、東京高裁の判決を不服として、最高裁へ上告した。

この頃より小倉市は石灰石採掘に歯止めをかけるため、平尾台を含む広範囲の国立公園指定を受けようとし五市二町と協力して運動を起し、昭和三十一年、国に申請したが、自然公園審議会は、平尾台をめぐって紛争中であるので、昭和三十二年三月、候補地として答申するにとどめ、指定まではいたらなかった。

昭和三十七年四月、最高裁は土地調査委員会の上告を棄却した。これにより昭和二十七年より続いた法廷闘争は終り、羊群原試掘権

問題に振り出しに戻った。

昭和三十八年二月、五市合併し北九州市が発足した。

北九州市は国定公園の指定には先ず鉱業権設定禁止区域に認められる必要があるとして関係方面に折衝し、昭和四十二年六月、平尾台北半分七六九ヘクタールの鉱区禁止地域指定を国に請求した。

土地調整委員会は現地調査、審問、聴聞会を聞いて検討の末、昭和四十四年十二月、請求地域の内四七一ヘクタールについて鉱区禁止地域に決定した。これによって自然保護と資源開発について調整ラインが引かれたわけである。

昭和四十六年二月、自然公園審議会に国定公園指定の申請をし、審議を経て、平尾台一、一四四ヘクタールを含む八、二四九ヘクタールが北九州国定公園として昭和四十七年十月指定された。

平尾台はかろうじて命脈を保つことができた。しかし開拓財産として分散処理された台地は、大資本の餌食となって蚕食されている。

昭和五十七年から起った保護区域内での造成地問題、天然記念物千仏洞に流入する赤水問題、台上の利権を巡っての抗争……

「平尾台が泣いている！」

故浜田市長や我有氏でなくてもそう叫びたくなる。平尾台の自然を守るため我々は団結して立ち上らねばならぬ。

平尾台の石仏と歌碑

山本公一

石のほとけ雑感

こゝ平尾台を含めて、旧東谷村・中谷村・西谷村に三谷四国霊場めぐりの大師講というのがある。

春秋二回この霊場めぐりがありこの石仏群もその霊場の一つになっている。

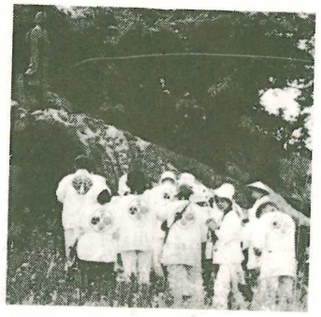
吹上峠の東、道路わきの畑の横の石の上に、グミやエの木の下やその周辺に十三体の石仏が弧を描いて配置されている。

その中の一体、瑠璃観音の像はかなり風化され、仏の輪郭もはっきりしない。瑠璃観音は三十三観音のひとつで、普通レンゲに乗って水に浮かぶ姿で知られている。平尾台の観音はハスを持って立つあどけない稚児の表情で優しく迫ってくる。

光背に文暦元、新道寺村とかすかに読める。新道寺村は今の小倉南区新道寺で、新道寺村の記録が文献に出てくるのは一六三八年が一番古い。文暦元（年）は一二三四年で、この石仏は、新道寺村の歴史が、文献記録より約四百年もさかのぼって存在していたことを教えてくれた。

この周辺にある石仏の中でひときわ高い弘法大師像は、地元の酒造家山家氏の寄進になるもので、その他、新しい石仏については、寄進者の氏名が刻まれている。

吹上峠から、自然歩道に添い、茶ケ床を通り、見晴らし台、千仏鐘乳洞への道の周辺に薬師如来、千手観世音、大日如来など石仏七十七体がある。



しかし、平尾台には全部で九十体以上が見られる。

これは、青龍窟・千仏鐘乳洞のものを除き、他は戦後大師講の方々が廃寺にあった石仏を平尾台に運び、四国や篠栗の八十八カ所に因み配置したものであり、比較的新しくて、寄進者氏名のあるものについては、東谷村の方々が寄進したものである。

設置場所については、平尾台の自然を壊さないように配慮され、展望のよい場所に設置したらと言う話もあったようであるが、春・秋の参詣のことも考え、昔の道に添って立てられたとのこと、そして、春秋の参詣前には巡礼路の草刈を寄進された関係者によって実施されている。

では、この石仏の中から特徴のあるものについて、その台上での位置とその信仰について述べることにしょう。

平尾台石仏群で一番多いのが薬師如来で約二十体ある。吹上峠と塔ケ峯にかけて座る薬師さまは、何かもの悲しそうである。

薬師信仰は七世紀後半ごろから始まったとされる。衆生の病苦や暗黒を救う仏で、業（ごう）にまみれ病気への救いを求めて、平尾台にも多く建てられたのだろう。今も参拝者があるのか、像の前には五円や十円玉が数個置かれていた。

毘沙門天、塔ケ峰から茶ケ床にかけて広がる羊群原の西側丘陵にハイカー達を見守るかのように立っている。像は高さ約八〇糎、優しい表情の阿弥陀如来や観世音菩薩などを見てきたハイカーは、いかめしい姿の毘沙門天像に、一瞬足を止める。

火焔（えん）光背の赤の塗料は殆どはげ落ち肩などには泥が。仏教守護の武将として七世紀以降、盛んに作られた四天王像の一つ、多聞天が独尊像としての信仰を集めるようになってから、毘沙門天と呼ばれることが多い。

大きく見開いた目、左手には多宝塔を持ち、厳しい表情で、はるかかなたをにらみすえる。太陽・知恵を具現する本尊ともいわれる。

虚空蔵菩薩　茶ケ床入り口から約四百米入ったあぜ道わきに鎮座する。木陰の下、宝冠をいただき右手を曲げて剣を持つ。蓮華座（れんげざ）に座る姿は気品に満ちている。虚空、つまり無限の空間を蔵していると名づけられるほど知恵や功徳が限り無いといわれる仏。

阿弥陀如来　吹上峠から塔ケ峰にかけての小高い丘、蓮弁に静かに座る。頭の螺髪（らはつ）は風化してもじゃもじゃに。ガンダーラの仏像の頭を思わせる。顔は大分臼杵石仏のホキ石仏にそっくり。

大日如来　吹上峠の入り口近くにある、この大日如来は彫りが幼稚で、宝冠もぎこちない。ふくよかな表情ではなく、むしろ、内に悩みを秘めたような寂しささえ漂っている。大日如来像信仰は、空海が中国から密教を伝えた九世紀から始まる。

地蔵菩薩　茶ケ床から千仏鐘乳洞にかけてのあぜ道わきの台地の下のドリーネのかげにある石仏。野仏としての「お地蔵さん」は立っている姿が多いが、平尾台のお地蔵さんは、ゆう然と座っている。

平尾台の歌碑を尋ねて

平尾台上には、四基の碑が建てられている。昭和五十九年一月十三日、理事の溝口連さんに案内して戴き、昨年末よりの残雪の平尾台に取材のため登山した。

九時十五分登山口発のバスに乗車、お客は溝口さんと二人、貸切バスの感、台上に十五分で到着、吹上峠にて下車、先ず由緒ある峠の石仏に参詣、農道を通り、柵を乗り越え、マルワランドへの道を辿ること五分、路傍の左側、榎大樹の下に自然石の巨岩の**句碑**が見られる。碑文は

ふるさとを
おもうまごころ
此処に止め
夢詩朗

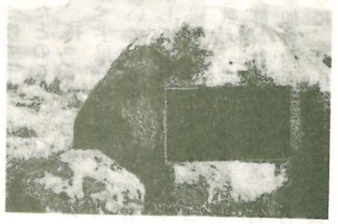
とある。

この句碑は、小倉南区高津尾出身、戦前中国山東省青島市で活躍、敗戦により帰国、餘生を筆管に託し、生来の趣味川柳を賞でて八十余歳でなくなられ、自叙伝「夢詩朗の本」の著者でもある出口高次郎氏の愛郷の志を祈念して、生前に大陸川柳同窓会、小倉番傘川柳会、豊景書道塾後援会が建立した。碑文の字は、出口氏の自筆によるものである。

この坂を登り、マルワランドの入場門の手前に、**「石の羊詩碑」**入口富陵会」の石柱が建っている。これより左に折れ、三十米の処に大平山をバックに自然石に銅板をはめこみ、活字体での石の羊・平尾台断章の詩碑がどっしりと、大羊のようにうずくまっている。作詞者栗原一登氏の話しでは、「毛筆による書体もよいが、後世の人の為には、誰にでも読める活字体がよい」と、富陵会には、石橋犀水先生を初め、有名な書家が大勢おられるのに、敢えて活字体にされたとのこと。その詩文を紹介すると、

石の羊 ― 平尾台断章

姫百合の朱き　山端に
うずくまり　肩寄せ合いて
何を聴く　石の羊よ
草の根の　悲しき歌か
地の底の　化石の声か
しらじらと　群れて　動かず
流れ行く　霧の　濡れ野を
音も無く　何処へ向う
カルストの　羊の群れよ
波白き　周防の彼方か
遥かなる　天の雲野か
永久の　歩みも　重く



この詩は、北九州市が市制十五周年記念に、合唱組曲「北九州」の作詞を栗原氏に依頼され作られたもので、序章「筑紫なる　北のわが街」で初まり、十二章「北九州・北九州　ふるさとや良し」で終る、七章目の平尾台を歌った石の羊の章である。

なお、この詩の作曲者は、エッセイ〝パイプのけむり〟でも有名な團伊玖磨氏である。

また、この合唱組曲「北九州」の発表演奏会は、昭和五十三年二月四日小倉市民会館で実施された。

栗原一登氏について一言ふれると女優栗原小巻の父であり、小倉師範二十期生で、日本児童演劇協会々長、本籍は北九州市八幡西区、東京都在住である。

詩碑への道をバック、丸和の宿泊施設に通ずる石段の登り口に、**第三の碑**、みかげ石の高浜年尾句碑がある。写真のように達筆で

「野遊の　心足らへり　雲とあり
年尾」とある。

この句碑は、昭和四十九年十一月四日北九州のホトトギス派の俳人、赤迫雨渓（故人）林田探花・山地曙子三氏が発起人となり、年尾氏の作品の中から、世界一のカルスト台地平尾台にふさわしい前記の句を選ばれ、碑を建立され、その除幕式には、北九州の俳人、それに　年尾氏および父の遺志をつぎ俳誌ホトトギスの主宰である娘の稲畑汀子氏が参加された由。

四番目の碑は、福岡市出身、俳誌「冬野」を主宰していたホトトギス派の俳人、河野静雲氏の句碑がバス終点広場にある。

写真のように、この句碑は、風雪にさらされ、自然石に毛筆書きを刻まれており建立が前三基に比べ古いだけに〈昭和四十七年〉碑面の文字は明らかでないが、

たもとほる
千振（せんぶり）ひきの
姨（うば）ひとり
静雲

と読める。

この碑の建立に当っては、ホトトギス派高浜虚子の高弟である故丸橋静子氏の句友であり、地元の銘酒〝無法松〟の酒造家山家治重氏夫人であり、カルスト句会のリーダーでもある山家ハツエ氏が尽力されたとのことである。

これらの四基の碑は、それぞれ平尾台の自然環境にマッチして、カルスト高原の美に、一段の趣をそえている。

◆ 若松支部の方へ、会費の集金は光安様の御好意に依りマルミツ眼鏡店で御願い出来る様になりました、御利用下さい。